

歌仙絵抄と女歌仙絵抄

——『伊勢物語改成』所載作品の翻刻・解題——

藤 田 洋 治

はじめに

昨春、新藤協三氏『三十六歌仙叢考』^①が上梓され、数年前に刊行された大伏春美氏『女房三十六人歌合の研究』^②と併せて、『三十六人歌合』や『女房三十六人歌合』などの膨大な写本群に対して、見通しがたったという点では研究史的に大いに意味のあることと思われる。

そして、偶然にも両氏がともに「絵抄」という近世期の注釈を翻刻しておられる。『古今和歌集』などの勅撰集や『百人一首』などと違い、ほとんど注釈がなされてこなかったこれらの詞華集^{アソボシ}に対する注釈を把握することは重要で、初学者向けのこのような注釈を把握することは、受容・享受のあり方をも含めて多面的な考察が可能になると思われる。

本稿では、近世期における初学者向けの注釈、特に元禄期に出版された注釈を翻刻・紹介して、この時期における注釈とそれ以降に及ぼした影響について考えてみたい。

ここで翻刻するのは、元禄十一年（一六九八）刊行の『伊勢物語改成』に合刻された『女歌仙絵抄』と『歌仙絵抄』である。『女歌仙絵抄』の本文は大伏氏の翻刻・紹介された『女歌仙新抄』や『絵抄女歌仙』などとほぼ同内容であり、『歌仙絵抄』のほう是新藤氏が翻刻されたものとは同名異書である。そこに付された注釈は、「絵抄」という名称からも推測できるように、

歌仙絵、歌意絵をともなった注釈であり、ここで言う歌意絵とは、歌内容を絵で表したものの呼称である。

【翻 刻】

凡例

『伊勢物語改成』に合刻された『女歌仙絵抄』及び『歌仙絵抄』を翻刻したものである。翻刻については忠実を旨としたが、歌に通し番号を付し、文には句読点を加えた。絵は全て省略し、漢字・仮名づかい、及び濁点や送り仮名の有無、ふりがなは、版本のままとした。ただし異体字は「哥」をのぞいて普通の書体に改めた。一部欠字は□で表わしている。

『女歌仙絵抄』

左 小野小町^{オノコナ}

1 思ひつゝぬれはや人の見えつらん夢としりせは覚さらしを

古今○此哥は人を思ひ／＼てぬるよはゆめともうつゝともわきかたき心なり。人のおもかげのみゆるは、さては夢にてやあるらん、ゆめならばさますましきものと、くやみたるうたなり。よく／＼心に入てきくへき哥にこそ。

右 式子内親王^{しよしないんわう}

2 わすれてはうちなけかるゝゆふべかな我のみしりてすくる月日を

新古今○しのふ恋のうた也。ずいふんしのふとすれと、わか思ひのせつなるにおもひあまりて我をもわするゝ心なり。ゆふべかなといへる心ことばともにきめうにこそ。ことになげく時節なるべし。

左 伊勢

3 三輪の山いかにまぢみん年ふともたつぬる人もあらしとおもへは
新古今恋上○詞書、なりひらの朝臣あひして侍りけるをかれかたに成ければ父か大和守に侍りけるもとへまいるとて、よみてつかはしける。此詞書にて哥はよく聞え侍る。三々の山もと恋しくはとよめるを、本哥にてよめる成へし。委はちうにおよはす。

右 宮内卿

4 見たせはふもとはかりにさきそめて花もおくあるみよしのゝ山
続古今○このうたは、よしのゝ風景をよく案してよめる哥なり。花は里ちかきかたより咲初るもの也。花もおく有といふ詞は作者のふんこつなるへし。

左 中務

5 秋風のふくにつけてもとはぬかなおきのはなはをとはしてまし
後撰○このうた、秋かせのふくにつけてといふにて、中のかれゝゝなるこゝろをもたせたり。おぎの葉なくは音信もあるへきものをとらむ哥なり。

右 周防内侍

6 ちきりしにあらぬつらさもあふ事のなきにはえこそうらみさりけれ
後拾遺○このうた、一度あふとそのちきりのかはるをまたかさねてあはねはうらむべきやうもなきといへる心なるべし。

左 殷富門院太輔

7 なにかいとふよもなからへしさのみやはうきにたえたるいのちなるべき

新古今○恋に身をなきものにする事も、なにかいとふべき。とてもなからへてはあるましきものといひて、かゝるうき事も是まてはかんにんしてありしか、いまははやかにんもなるましといふ心をいへる哥也。此たへはかんの字なり。たえてとかくは絶の字にて、こゝろかはり侍る也。心をつくべし。

右 俊成卿女

8 俤のかすめる月そやとりけるはるやむかしの袖の涙に

新古今○月やあらぬはるやむかしといへるを本哥にて、題の心をよくゝいひとれるうた也。哥の心になりかへりてきくなるへし。

左 右近

9 あふことを待に月日はこゆるきの磯に出てや今はうらみん
後撰○此うたはいつゝはとあふ事をまちゝて、月日はこゆると秀句にいへる哥也。うらむへき相手もなければ磯に出て、いまはうらみをはらすべきといへる哥なるへし。

右 待賢門院堀川

10 うき人を忍ふへしとはおもひきやわか心さへなとかはるらん
千載○はじめよりかくのこときのつらきめを見てかんにんすべきなとゝはおもはさりつるを、さきの人の心のかはりはてたるのちもなをしのふは、わかこゝろさへかはるといへるなり。さへといふにてさきの人の心のかはるをうらみてよめるなるべし。

左 右大将道綱母

11 たえぬるかかげたに見えはとふへきをかたみの水はみくさいにけり
新古今○詞書、入道久しくこざりける比、ひんかきていてけるゆるつきの水、いれながら侍けるをみてとあり。水入ののこりたるをかたみの水といへり。その水も水草生るごとくになりて、影たに見えず成行をうらみてよめる成へし。此五もしたへぬるかのかもし、哉ときくなるへし。

右 宜秋門院丹後

12 なにとなく聞はなみたそこほれける苔のたもにかよふ松かせ
新古今○このうた、きこへたるとをりなり。五もしなにとなくといへる心をつくべき哥なり。すがた詞とゝのほりたかうたにて、まことに秀逸なるべし。

左 馬内侍

13 あふことは是やかきりのたびならん草のまくらも霜かれにけり
新古今○詞書、左大将朝光ひさしう音信侍らてたひなるところに來あひて枕のなれば草をむすびてしたるに、とあり。哥の心あきらかなり。此度の字、度によそて云へるなるべし。

右 嘉陽門院越前

14 夏引の手ひきの糸のとしをへてもたえぬ思ひにむすほゝれつゝ

新古今○久恋といへる事を、とあり。序哥也。たえぬもむすほほるもみないとのえんにいへる也。つゝといふ詞、久しき心に毎度用ひ来る事に侍る。

左 赤染衛門あかぞめもん

15 つねよりもまたぬれそひしたもとかなむかしをかけておつるなみだに千載○詞書、上東門院にまいりて侍りけるに一条院の事などおほし出たる御気色也ける朝なりける、此詞書にて心は明なり。つねにもこの御歎にじづみ侍る内に上東門院の御けしきをさつし奉りて、一入なみだもふかき心をよめる成べし。

右 二条院讃岐ふたにんざんぎ

16 一夜とてよかれしとこのさむしろにやかてもちりのつもりぬるかな千載○恋のうたとてあり。かりそめのふしをいひ出て、ひとよあはで過ぬるかそれよりあひ思ふ中もやかて床にちりのつもる斗にうとくになるとよめるなるへし。かくのとき事ふうふほうゆふの中につけてもおほき事にこそ。

左 和泉式部いづみしきぶ

17 もろともにこけのしたに□くちすしてうつもれぬなを見るそかなしき金葉○詞書、小式部内侍うせて後、上東門院より年比給りけるきぬをなきあとまでつかはしたりけるに小式部内侍と書付られたるをみてよめる、と有。此哥こそでに残りたる書付に我むすめの名のあるを□此小式部といへる名もともにくちぬるを歎く心也。原壤げんじやうの土にはねをうつむといへとも名をうつまぬといへると也。

右 小侍従こじじゆう

18 しきみつむ山路の露にぬれにけりあかつきおきのすみそめの袖新古今○此うた儀なし。官女の身にては容顏粉粧をもとゝする事也。しかるにそのみ仏の道に身をなして、かゝる山路のつゆに身をそほち、あかつきことにおきいづるすみそめのそでになしつる心、まことにしゆしやうなるうたにこそ。

左 藏人左近くらねりさこん

19 沼ことに袖はぬれけるあやめ草こゝろににたるねをもとむとて新古今○詞書に、くず玉を女につかはすとておとこにかはりて、と有。五もし、あやめのえんにいひ出せるなり。沼はわかなみだのふかきにたとへて、

おもひの根のふかきにくらぶへきはあやめくさなり。その根をもとむるとてかくのことく、そでをしほるといへるうたなるべし。

右 後鳥羽院下野ごとほあんしめつげ

20 心していたくななきそきり／＼すかことかましき老のねさめに続古今○このうたさせる義もなし。きり／＼すも心あらばかしましくながてあれかしといへるなり。いたくはつよくといふ詞なり。かごとゝいふに色々の義あり、是はかこつといふ詞なり。たゞさへ老はねさめして世をかちがましきにきり／＼すのねやちかくなくをにくみていへるうたなるへし。

左 紫式部むらさきしきぶ

21 見し人の煙となりしゆふべよりなぞむつまじき汐がまのうら新古今○此詞書に、上東門院に少将身まかりて後、つねにうちとけて書かはしける文の物の中に侍りけるを見出して、と有り。もつともあいしやうのうた也。みし人をけふりになしてより、しほがまといふ名も一しほむつまじきといへる成へし。名の字あはれふかきにこそ。

右 弁内侍べんないし

22 をく露は草葉のうへとおもひしに袖さへぬれて秋はきにけり続後撰○九月十三夜十首歌合、初秋の歌とあり。此うたもことはり明なり。露は草葉のうへはかりと思ひしを、秋は愁殺しうせつの氣にてものかなしき時なれば、袖さへぬるゝといふうたなるべし。

左 小式部こしきぶ

23 しぬはかり歎きにこそはなげきしがいきてとふべき身にしあらねば後拾遺雜部に入○此哥、詞書に二条の前のおほいまうち君ひころ煩ておたりて後、なとゝはさりつるぞといひ侍りければよめる、と有。わつらひをとをはぬをうらみられてよめる哥也。其折ふしいかにととはざりしは、こなたもしぬはかりなげきにしつめる折なれはおみまも申さずといへる成へし。下の句は心あきらかなり。

右 少将内侍しょうしょうないし

24 恨てもなきてもなにをかこたまし見し夜の月のつらさならでは続古今寄月恋○此哥はうらみてもなきてもいはんかたそなきかたみに見ゆるかけならすして。是を本哥にして、心は此うたになりかはりて、しかも本哥

にかゝはらぬうた也。わかれて後うらみてもなきても其夜の月ならてはかこつへき相手もなしといへる成べし。

左 齋宮女御

25 なれ行はうき世なれはや須磨のあまのしほやきころもまとをなるらん
新古今○天曆の御時、間遠にあれやと宣せけるに、と有。是は、すまのしほやきころもおきをあらみ間遠にあれや君がきまさめ、といへるを心におほしめしての詞なり。それを本哥にして、なれ行はうき事のおほふ世なれば、間遠に日をふるとよめるうたなるべし。

右 伊勢大輔

26 わかれにしその日ばかりはめぐり来てまたもかへらぬ人そかなしき
哀傷○なき人の忌日ばかりは年／＼にめぐり来れとも、その人は二たひかへらぬ事のかなしきといへるうたなり。心あきらかにかくれたる所なし。

左 清少納言

27 たよりある風もやふくと松しまによせて久しきあまのつりふね
玉葉○詞書に、人のもとにつかはしける、とあり。久しくたよりもなくて、いかにしてつてもあるへぎとまつ心なり。我身をあまのはしふねになぞらへていへる心なるべし。

右 土御門院小宰相

28 はるは猶かすむにつけて深夜のあはれを見る月のかけかな
続古今○春の月、といふ題にてよめるうたなり。月の眺望はあきのものに古しへより申事にあれと、春はなを霞につけてあはれもふかきといへるうたなるべし。此さくしや家隆卿の女なれば、うたも一しほよせひふかくおぼえ侍る。

左 大式三位

29 うたかひしいのちはかりはありなからちきりし中のたえぬべきかな
千載○詞書に、かたらひし人の久しく音信さりければ、つかはしける、とあり。おもひすてられつるやとうたかひなからもわがいのちはたえすしてちきりし中はこのまゝにしてたえべきかなとなげくころなるべし。

右 八条院高倉

30 くもれかしなかわるからに悲しきは月におほゆる人のおも影

新古今○此うた、月にはちゞの物思ひをそふるものなれはなかわましきとおもへとも、さすがに人のおもかけのなつかしくてながむるからに、一しほものかなしきもまさる心をよめるうた也。くもれかしとはおもひあたりていへるうたなるべし。

左 高内侍

31 独りぬる人やしるらん秋の夜をなかしとたれか君に告らむ
後拾遺○詞書に、中の関白かよひはじめける比、よかれて侍りけるつとめて、こよひはあかしがたくてなどいひて侍りければよめる、とあり。此うた秋のよのながきといふ事も、ひとりぬる人こそしるへけれ、そこにはひとりねもあるあるまじければ、いかなる人かひとりねをして夜の長き事をおしへ侍ると也。

右 後嵯峨院中納言典侍

32 偽りとおもはて人もちきりけんかはるならひの世こそつられ
続後撰○此うたは、ちぎりし中のかはるをうらみてそのうらみのあまりに世をうらむうたなり。世にかはるといふならひのなくは、其人もかはるましきを、いつはりのある世のならひなれば、さもおもはてかはりつるよといへるころなるべし。

左 一宮紀伊

33 浦風に吹あげの涙のはまちとり波たちくらし夜半になくなり
新古今○此うたは、させる義なし。けいきをよくあんじてよめるうたなればころることばつゝきなど、よく／＼はらにあちあふべき事にこそ。

右 式乾門院御臣

34 身をさらぬおなしうき世と思はずはいはの中をもたつね見てまし
続後撰○述懐。此うたは、いかでかはいわほの中にすまはか世のうき事の聞えこさらんといへるを、本哥にしてよめるうたなり。世のうき事はとにかくにも身をさらぬものとおもはゝいわほのなかをもとめんと也。

左 相模

35 もろともにつかとかくへきあふことのかたむすひなる夜半の下ひも
後拾遺○しのひてものおもひけるころ、いつにやしるかりけんうちとけたる人、なとかものむつかしけなどいひければ、ころのうちになんおもひける

とあり。うたの心はかくれたる所なし。御詞よくとゝなふりたるうたなり。
尤秀逸に聞ゆ。

右 藻壁門院少輔
さうへきもんげんしょうふく

36 それをたに心のまゝのいのちとてやすくも恋に身をやかへてん
続古今○此哥は、恋しきにいのちをかふるものならはしにややすくそあるへ
かりける、といふを本哥にてよめるなり。恋はやすからす心にもかなふま
しけれと、それにいのちをなきものにすへし。そのいのちばかりは我心のまゝ
なれば、心やすく恋に命をかふべきといへる哥なるべし。

『歌仙絵抄』

左 柿本人麿
かきのもとのひとまろ

1 ほの／＼とあかしの浦の朝霧にしまくれ行舟をしぞおもふ
古今集第九羈旅哥。此心は夜のほの／＼と明はなるゝ心を、所の名にいひか
けて、さてあざざりとつゝけ、しまくれ行とつけたることば、きめうなり。
舟をしそ思ふとは、此うらにとまりせし船のこぎゆく末のわくかたもなき心
ばそさをおもふよしなるべし。

右 紀貫之
きのつらゆき

2 さくらちる木のした風はさむからで空にしられぬ雪そふりける
拾遺第一春哥。此心は、さくら花のちるが雪のふるにゝたれはまことの雪か
と思ふに、木のした風のさむからねは、これはそらにしられぬ。ふるゆきに
はあらず、さく花の雪よとおもひしる心也。もつとも有がたきふうていの哥
なりとぞ。

左 凡河内躬恒
おほしかうちみつね

3 いつくとも春のひかりはわかなくにまだみよしのゝ山は雪ふる
後撰第一春哥。此心は、春のひかりのいたらぬくまなきを、君の御めくみに
たとへてわが身もときをゑべきおりふしよたのめと、そのしるしなきうれ
ひをのべたる也。またみよしのゝみの字に、我身をもたせたり。雪降とは有
しまゝのさむさに苦て春の光にあはぬ也。

右 伊勢

4 三輪の山いかに待みんとしふともたづぬる人もあらじと思へは

古今集第五恋哥。此うたは、今いせかゆくかたのやまとの国みわの山によせ
てよめり。君とあはぬ中にてわかるゝならば、たとへとしへてもたつねとは
るゝをりやあらんと、まぢみる事もあるべきにかやうにつらき心にてかれは
つる身なればいかにまぢみんとなり。

左 中納言家持
なかつな言けもち

5 はるの野にあさるきゝすのつまこひにをのかありかを人にしれつゝ
拾遺第一春哥。此心は、春のくさふかきのにすむきじの人にしられずして、
こゑをたつるによりて、そのありかをあらはす也。こゑをたつるは、つまを
こふるゆへ也。はかなき恋に身をほろぼす小鳥、あはれるていをよめり。

右 山辺赤人
やまべのあか

6 わかのうらに汐みちくれはかたをなみあしべをさしてたづなきわたる
万葉集第六。わかのうらは、きのくにゝ有。かのうらのひかたにをりいるた
づのしほみちきたりて、そのかたのなくなりぬれば、あしへをさしてなきゆ
くとの心也。あしべには、たづしるにくからめどかたのなくなればかないて、
なき渡る。目のまへのけいをよめり。

左 在原業平朝臣
あはらののりひらあそみ

7 世の中にたえてさくらのなかりせは春の心はのとけからまし
古今第一春哥。此哥は、花にしうしんのあまりにふかきよりいへるなり。さ
れははるは、花にわか身をなやまされて、やすき心もなければ、おもひわび
て、たえてさくらのなきそならは中／＼のとなる春をは経べきものをとな
り。

右 僧正遍昭
そうじやうへんせう

8 たらちねはかゝれとてしもむば玉の我くろかみはなですやありけん
後撰第十七雑哥。たらちねとは、父母の事也。哥の心は、おさなかりし時、
父母のかしらかきなてゝいとおしまれし心には、かく行すゑにかみをおろし、
しゆつけせよ、おもひてはそだてられしを、となり。かゝれとてとは、かく
あればといふぎなり。

左 素性法師
そせいほふし

9 見わたせは柳さくらをこきまぜてみやこそはるのにしきなりける
古今集第一春哥。此うたは、みやこのいへゝをみればは、やなきさくらを

うへなとしてあれば、やなぎはみどりに花はくれないなるが、青地あか地のしきをりしきたると見ゆるそ、となり。みやこの春のけしき、めもあやる心をありく、とよめるなり。

右 紀友則きのとものり

10 夕されはさほの河原の川風に友まとはしてちとりなくなり

拾遺第四冬哥。さほの河原は、やまとの国にあり。古へよりちとりをよみならはせる所なり。うたの心は、かわ風のさむくふくゆふくれにちどりのともをしたひてなくを、あはれと思ひやりて、かくよめるなるべし。

左 猿丸太夫さるまる

11 遠近そとちのたつきもしらぬ山中におほつかなくもよぶことり哉

古今集第一春哥。此哥は春の山ふかく入て、よぶこ鳥のこゑをきゝたるをりふしの物すごき心をよめり。おちこちは、こゝにてはとをきちかきといふ義にあらず、かなたこなたといふ心也。たとへは、さびしき山中に有てたよりと思ふ所もなきに、よぶこ鳥のなくはおぼつかなしと也。

右 小野小町

12 わびぬれば身をうき草の根をたえてさそふ水あらばいなんとそ思ふ

古今集第十八雜哥。わびぬればとは、我世のおとろへてわびしくなりたる事也。身をうき草とはいづかたにもたよる所なくうきてある心を、なをまた身をうきといひかけて、いづくへなりとも水のさそはんにしていなんといふころばへをよめり。

左 中納言兼輔かねすけ

13 みじか夜のふけゆくまゝに高砂のみねの秋風ふくかとそきく

後撰第四夏哥。此心は、ふりゆくよはの何となく心すむ折から、ことのこゑのさやかにものすごきこえたるは、たゞたかさこの松に風の吹たるかとうたがはるゝぞとなり。ことばかきに夏の夜ふかやふことひくをきゝて、とあり。

右 中納言朝忠あした

14 あふ事のためてしなくは中くに人をも身をもうらみさらまし

拾遺第十一恋哥。此心は、一たひほのかにあひみてあかぬ人の、そのまゝにたえはてゝ、またもあふ事のなきをうらみたるなか也。つれなきをうらみ、

わか身をうらむるといふはかすならぬをうらむるなり。人はかやうにうらみもはてじとなり。

左 権中納言敦忠あつた

15 いせの海ちひろのはまにひろふとも今はなにてふかひかあるべき

後撰第十二恋哥。此心は、としこ思ひかけ奉りし君の、さいくうにさだまりて、いせへくだり給ひしかは、いかてとたのみわたりし君しもかゝる御身にさたまらせ給へは、何事もかひなくなりぬる世かな、といふ心也。さるによりて、そのうらをととり出てよめり。

右 藤原高光

16 かくばかりへがたく見ゆる世の中にうらやましくもすめる月かな

拾遺第八雜哥。かくはかりとは、世の中なにゝつけてもうからず、といふ事なれば、はやくいとひはなれんと思ふ折ふし、月を見れば何のさはがしきいろもなく、すみわたるをうらやましとおもひて、よめり。

左 源公忠朝臣きんた

17 行やらず山路くらしつ郭公いまひとこゑのきかまほしさに

拾遺第二夏哥。此心は、いま一こゑとは、さきに一こゑをきゝしが、あまりになごりのおしければ又一こゑなく事もやとまつほとに、ゆくへき山みちに日をくらししたるとなり。ほとゝきすにしうしんふかきころをよめり。

右 壬生忠岑みぶのたけのみね

18 子の日するのべに小松のなかりせば千代のためしに何をひかまし

拾遺第一春哥。子の日とは、正月はつ子の日に人く野へに出て小松をひき、千とせを経へきいはひをする事也。小松とは、ことしおゐのまつをいふなれば、ゆくすゑひさしきことをいはひてよめるうたなるべし。

左 斎宮女御

19 このねにみねの松風（マ）かよふらじいづれのをよりしらべそめけん
拾遺集第八雜哥。此心は、いかなるおのへの松風がこゝにかよひきたりて、ことのねとなりそめたるぞ、とき（マ）。いづれのをよりといふは、ことのをに山のをゝこめたり。その心やさしきふうていなり。

右 大中臣頼基よりもと

20 一ふしにちよをこめたる杖なればつくともつきし君かよはひは

拾遺集第五賀哥。此心は、竹のつえにはいくらともなくふしをこめたれば、そのふし／＼に、千代をこめていくちよとかきりなき君かよはひといひかなへたる賀のいはひによめるうたなるべし。

左 藤原敏行朝臣

21 秋きぬとめにはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

古今第四秋哥。此心は、万物の来はめにみゆれとも、時節の来はみえず。其折、天地の気のうつり香によつてしらるゝ也。春夏の来は、さしておとろくまでの事あらず、秋は風ふきそむるよりもて人の身にしみ、心をいたましむれば、おどろかれぬるとはいへるなるべし。

右 源重之

22 風をいたみ岩うつ波のをのれのみくたげてもを思ふ比かな

詞花集第七恋歌。此心は、うこかぬ岩をもつてつれなき人をたとへくたけやすきなみに我身をさして、思ひをつくすよしなり。風のいたく吹、あらいそには岩うつ波もつねよりくたけまさるが、ゆへなれば也。

左 源宗于朝臣

23 常磐なる松の緑も春くれば今一しほの色まさりけり

古今集第一春哥。此心は、ふだんかはる心なき松さへ春になればひとしほみどりのわかく成そと也。万木の時をえて春めくのみにはあらず、松のみどりもの／＼字に、そのころよくきこえたるうたなり。

右 源信明朝臣

24 こひしさはおなじ心にあらずともこよひの月を君見ざらめや

拾遺第十三恋哥。此心は、人を恋しと思ふやうに我を思はじ。されど、わかこよひあはれとみる月を君もさりとともに見ぬ事はあらしと思ひやり、ねかはくはおなじころにて月をも見はやといふうた也。

左 藤原清正

25 天津風ふけるのうらにゐるたつのなどか雲井にかへらさるべき

新古今第十八雜哥。ふけいのうらはいづみの国にあり。たつはうらにすむといへとも、つねに雲井を思ふ心あり。されは、わか身のさすらひせし事は今たつにおもひよそへてよめり。雲るとは、くものうへといふ心なり。

右 源順

26 水の面にてる月なみをかぞふればこよひそ秋のもなかなりける

拾遺集第三秋哥。月なみとは、一月／＼のしだいするをいふ。それをてる月と又いけのなみにもたせり。もなかは八月十五やなればなり。月なみをいつ／＼とかぞへきたりて、月をまちし心をふくみてよめるうた也。

左 藤原興風

27 たれをかもしるひとにせん高砂の松もむかしの友ならなくに

古今第十七雜哥。此心は、わか／＼りし時よりなれたるとはいかほとかありけん、みな世のうつりかはりて老後までそのちぎりかはらずいひかはすはひとりもなきと也。たかさごの松はひさしきものなれとも、これはともとしてかたらんよしあらず、とうちわびてよめるうたなり。

右 清原元輔

28 秋の野、萩のにしきを故郷の鹿のねながらうつしてしかな

家集第十一秋哥。ふるさとすみふるしたる里をいふ心なり。秋の野のはぎのさかり成は、にしきのことくにして見事なるをわかやどにうつしうへて見んと思へども、しかのねと共にうつさすは、なにのせんもなかるべしとなり。

左 坂上是則

29 みよしの、山のしら雪つもるらしふる郷さむくなりまさるなり

古今集第六冬哥。此古里は、ならの旧都をさしていふ。今此所にてたびねをすれば、さむきまさりておぼゆるか、よし野の山の雪さこそはつもらめとおもひやりてよめり。よし野は、ならよりははるかにへたゝれる所也。山ふかうして雪はやうふれはなり。

右 藤原元真

30 咲にけりわか山さとの卯の花はかきねにきえぬ雪と見るまで

家集第十四夏哥。うたのころは、さききるまゝなり。よのつねのかきねにさきたりともうのはなゆきと見ゆべきを、わか山さといふに心をつけてきかるへし。もつともそのかんふかし。

左 三条院女藏人左近

31 いは橋のよるのちきりもたえぬべしあくるわびしきかつらきの神

拾遺第十八雜賀哥。かつらきのいわはしをは中たゆる事のためしにはよみ来れる也。やまとの国にあり。しのびてあふ事はあくるをまたて帰るべき。人

の帰らしとて夜にそ人にみつけれんかはづかしきを、彼神の昼の形をくるしめるにたとへて明がわびしきとはいへる也。

右 藤原仲文なかふみ

32 有明の月のひかりを待ほとにわかよのいたく更にけるかな

拾遺集第八雜哥。廿かすぎてのち出る月をあり明とはいふ也。あかつきかけて出る月をまつとせは夜いたくふけぬべき也。其月を待ふかすごとく我寿ふけぬべきと也。

左 大中臣能宣ちのぶのぶ

33 ちとせまてかきれる松もけふよりは君にひかれてよろつ代やへん

拾遺集第一春哥。此ころは、ちとせをかぎりたるよはひなれども、きみが手にふれてひくならはまつのよはひも君につれて万代をさかへんといはふなり。

右 壬生忠見みよたけ

34 やかずとも草はもえなんかすが野をたゝ春の日にまかせたらなん

新古今第一春哥。此心は、つねの野ははるかやぐがならひなれとも、かすがのはやかすもあるべし、いかなれはかすかは春の日とかけり。はるのひかりのあたゝかなる野なれば、草はよくもえ出んぞと也。春の日を火に持てよめり。

左 平兼盛かねもり

35 暮て行秋のかたみにをく物はわかもとゆひの霜にそありける

拾遺集第三秋哥。此心は、たとへは人のはて行時は、わすれかたみとて何にてもこのしをくものなるか、しかるにゆく秋のかたみとてはとゝめをくものもなく、只わがかしらのしもを置そと也。もとゆひのしもとしらがをいふなるべし。

右 中務

36 秋風のふくに付けてもとはぬかな萩の葉ならは音はしてまし

後撰第十二恋哥。秋風の吹とは、人のわれをあきそむるとの心也。おきのは、そよぐととおとつるゝもの成る。人の心の秋風は、ふくに付ていよくおとつれのたゆるぞと也。あだ人は、たのむ所なしとらみやりて、とはぬかなとよめり。

【解題】

一、『伊勢物語改成』と元禄十一年という時期

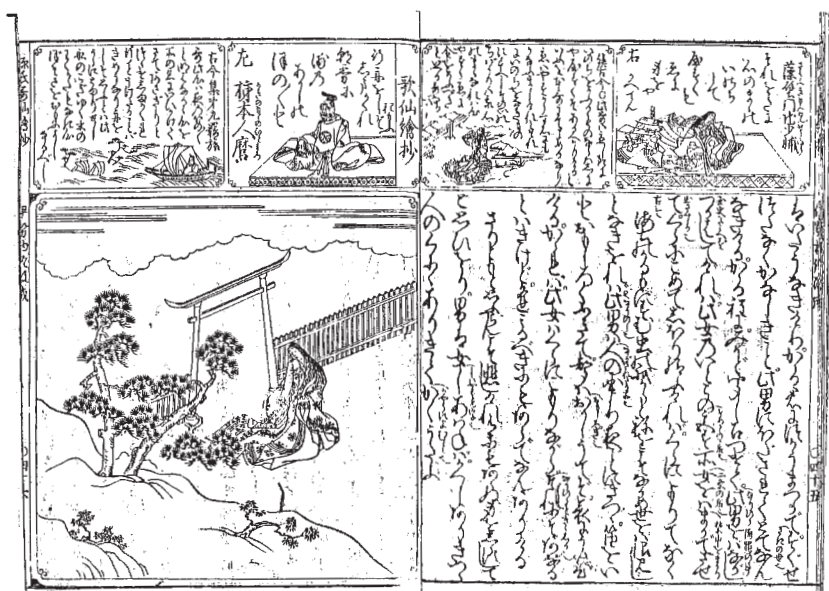
近世期になると、出版技術も向上し、また安定した時代背景もあって、原本の出版が相次ぐ。上野洋三氏は、寛永五年（一六二八）から元禄十七年（一七〇四）までに出版された歌書を八三七点掲げておられるが、あくまでも記録に残ったものの数であり、また和歌関係に絞った数でもある。出版物全体となると、さらに多くの点数となることは当然である。このうち、元禄期（元年（一六八八）から一七年）における『伊勢物語』、『百人一首』、『三十六歌仙』などの刊行物を調べると、『百人一首』は『武家百人一首』のような異種百人一首を含めて二点、ほとんどが絵入であることも特徴である。『伊勢物語』は二点、これも全て絵入である。三十六歌仙などの歌仙についても、『歌仙貝』や『絵入新板歌仙』などを含めて七点が刊行され、注釈書である『六々私抄』を除くほとんどが絵入であろうと推定される。

このように絵入の作品が次々と出版されていることがこの時期の特徴であり、また例えば『伊勢物語大成』のように、『伊勢物語』の版本に『百人一首』や『三十六歌仙』などを合刻したり、『七宝百人一首』のように、三段組にして、下段に『百人一首』、中段に『伊勢物語』、上段に『源氏物語引歌』、『三十六歌仙』、『三十六人女歌仙』、『歌仙貝』などを合刻したものなどが表れた頃でもあった。

このような趨勢の中で、元禄十一年に『伊勢物語改成』は刊行される。絵入の『伊勢物語』に加えて、『源氏物語歌と香の図』、『女歌仙絵抄』、『歌仙絵抄』、『六歌仙（和歌）』が合刻されている。刊記に「元禄拾一戊寅歳正月吉日／江戸芝神明前并筒屋忠左衛門／京押小路橋町大文字屋七郎兵衛」と見え、京と江戸で出版された三冊本である。なお、翻刻に用いたのは、『江戸日本橋南一丁目出店／出雲寺和泉掾』という版元名が見える、江戸中期頃の後刷で、二冊本。表紙は大きさが縦二五、三寸横一八、七寸、薄缥色、横刷毛目文様がある。内容を元禄版本と比較したところ、全く一致していたために、翻刻は紙焼写真や写真版を用いず、架蔵の後刷本を用いた。



【図版一】 『伊勢物語改成』（17丁ウと18丁オ）



【図版二】 『伊勢物語改成』（45丁ウと46丁オ）

合刻部分の柱刻には図版で見えるように「源氏歌仙絵抄」とあり、如何なる作品を指すものか一見とまどうが、合刻作品を一括した呼称であると推測できる。

このように、この時期、『百人一首』版本や『伊勢物語』版本を中心に、他の小さな作品を合刻するということがよくなされていた。『百人一首』のほうは、女性向けの往来物と結びつき、さらにいろいろな作品・教訓・教養を加えた形で江戸末期、明治初期まで刊行が続くこととなるが、『伊勢物語』版本の合刻は、この時期に行われたものの、これ以降はほとんど見ることができない。

二、「絵抄」という呼称

注釈書に「絵抄」という呼称を用いている例は、『百人一首』や『徒然草』など幾つかの作品に例がある。また三十六歌仙や女房三十六歌仙に関しても、幾つか存在する。そのものの書名で出版されていないものでも、例えば『大江文庫目録』に次の九点が収録されている。

- 一、『女今川状女手習状女教千金寶』（寛政五年刊）所収『女三十六歌仙絵抄』
- 二、『女教小倉色紙』（寛政五年刊）所収『女三十六歌仙絵抄』
- 三、『小倉百人一首』（寛政五年刊）所収『女三十六歌仙絵抄』
- 四、『婦教訓萬寶全書安都麻嘉雅美』（文政元年刊）所収『女三十六歌仙絵抄』・『三十六歌遷絵抄』

五、『婦教訓萬寶全書 安都麻嘉雅美』（文政一二年刊）所収『女三十六歌仙絵抄』

六、『女訓今川寶囊』（天保四年刊）所収『三十六歌仙絵抄』

七、『女寶鏡』（天保四年刊）所収『女三十六歌仙絵抄』

八、『女要博覧小倉錦』（天保四年刊）所収『女三十六歌仙絵抄』

九、『女用文章往かひ振』（天保四年刊）所収『三十六歌遷絵抄』

『女三十六歌仙絵抄』が七点、『三十六歌遷絵抄』が三点である。このうち、『女三十六歌仙絵抄』は、所収する本が全て須原屋茂兵衛、須原屋伊八という書肆による刊行であり、内容は一致している。三の『小倉百人一首』は、

後表紙で手書き題簽に「小倉百人一首」と記され、それを書名として登録しているもので、二や四と同じ刷のものである。当然四の『三十六歌遷絵抄』も同じ版元で、九も同じ版元である。結局『女三十六歌仙絵抄』が一種類、『三十六歌仙絵抄』の類が二種あることになる。また、架蔵本『小倉百人一首』（近世末期刊・袖珍本）にも『女三十六歌仙絵抄』が収載されており、これには刊記がなく版元も不明なのであるが、「絵抄」という名称のものが幾つか存在したことが窺われる。



【図版三】大江文庫・『女今川状女手習状女教千金寶』所収
(女三十六歌仙絵抄は、タテ12.6×ヨコ15.4センチ)



【図版四】『小倉百人一首』(架蔵本)
(大きさタテ3.0×ヨコ7.0センチ)



【図版六】大江文庫・『女訓今川寛』

(人麿 タテ7.0×ヨコ4.5センチ)



【図版五】大江文庫・『婦教訓萬寶全書安都麻嘉雅美』

(人麿 タテ12.8×ヨコ6.8センチ)

図版三では、小野小町の和歌と歌意絵に取り込まれる形で小町が描かれ、右の式子内親王も和歌と歌意絵の中に内親王が描かれている。図版四では、小町が脇息にもたれかかり、傍に灯りが見えているが、これも歌意絵に歌人像が取り込まれた形で、図版三の構図を簡略にしたものと推定される。もう一つ中務の場合も、秋の萩の草原にたえず女性が描かれ、歌意絵の中に作者・中務が入り込んでいる。図版五の『歌仙繪抄』では、人麻呂、貫之ともに和歌の下部に描かれているが、図版三と同様に、歌意絵の中に歌人が取り込まれた形となっている。図版六では、歌人像・歌仙絵が省略されて和歌と歌意絵のみとなっている。人麻呂は、和歌に詠まれた明石の景と微かな帆船の帆、貫之は、桜の散る景、躬恒は早春の山の景で、いずれも歌意絵そのものであると考えられる。

『百人一首』版本や女子往来物における「絵抄」は、このように和歌と歌意絵を伴ったものと考えられ、注釈の必要性よりも歌意絵で表すことが重要であったと推定される。

ところが、新藤氏が翻刻・紹介しておられる『歌仙繪抄』には、歌仙絵は彩色の施されたものを用いているが、歌意絵が存在しない。他の「絵抄」がほとんど女子往来に合刻されていたのに対し、この注釈書は藤原正臣が初学者に向けて和歌の注解を示したもので、著者が明確であり、注釈の意図が明確であることから、他の「絵抄」とは異質なものと考えられる。それは例えば序の中で「繪は喜多武清にはかり古図によりてかきつ。装束のさま色目などはその人々の時世にかゝわらず、つかさくらゐにつきて、けはれよのつね夏冬のやうくをわきて、そのおほむねをしるすにん。」と絵について自ら記すごとく、歌仙絵を忠実に描こうとしたための名称であることから明らかにであらう。類似する例として、石津亮澄著の『女訓玉文章』が想起される。文政九年刊行のこの注釈書は自ら序において「難波津手習ふ女のわらはの耳にきこえやすからむために」作成した『百人一首』注釈で、従来の注釈を引用・要約したものではなく、『女訓玉文章』としても刊行され、そこらには「百人一首絵抄」という角書があるという。



【図版八】〔矢口本〕（二一丁・ウ）



【図版七】〔矢口本〕（二丁オ）

『女歌仙絵抄』は、女房三十六歌仙の和歌、三六首に注釈を加えたもので、同様の書を大伏氏は、天和二年（一六八二）刊の天理図書館蔵菱川師宣筆『女歌仙新抄』、寛政九年（一七九七）刊の『絵抄女歌仙』、江戸後期写の盛岡市中央公民館蔵『女三十六歌仙』を紹介しておられる。『女歌仙絵抄』は、大伏氏の触れられた三書と和歌はもちろん、注釈はほぼ同内容を呈し、先行する天理図書館蔵『女歌仙新抄』の影響の元に作成されたものと考えられる。

なお、『伊勢物語改成』（以下『改成』と略称）の直後、元禄一三、四年頃に出版されたと推定される『百人一首』にもほぼ同様の注釈が合刻されている。正式書名は不明なのであるが、図版七・八に示した絵入の『百人一首』版本である。矢口丹波記念館所蔵のもので、表紙も剥離した状態で、書名も不明ながら、人麻呂の名前の下に「元禄十三年迄千三年二成ル」と見え、元禄一三年以降に出版されたものと推定される。仮に「矢口本」と呼称しておく。矢口本は、本文も巻末二丁分が欠落しているが、本文は三段組、二段目には「源氏引歌」「女歌仙絵抄」「双六」「三十六歌仙」などが合刻され、三段目の『百人一首』は、図版に見るごとく和歌、歌仙絵の他に和歌の上部にその注釈、さらにその左に歌意絵が掲載されている。また、一段目には「折型」が見えるが、他にも婚礼の作法や年中行事などの記事が多く、女子教養の書となり始めた頃の『百人一首』版本の特徴を示している。

天理図書館蔵の菱川師宣筆『女歌仙新抄』（以下、『新抄』と略称する）の出版が天和二年として、『伊勢物語改成』まで十数年が経過しており、『新抄』を利用したことは十分考えられるのであるが、実際に注釈本文を比較してみたい。

（一）『伊勢物語改成』（ふりがなは（二）ともに省略。）

右 待賢門院堀川

うき人を忍ふへしとはおもひきやわかこころさへなとかはるらん
千載〇はじめよりかくのこときのつらきめを見てかんにんすべきなと、はおもはさりつるを、さきの人の心のかはりはてたるのちもなをしのふはわかこころさへかはるといへるなり。さへといふにてさきの人の心のかはりけるをうらみてよめるなるべし。

『矢口本』

右 待賢門院堀川

うき人を忍ふへしとはおもひきやわかこゝろさへなとかはるらん
千載〇はじめよりかくのこときのつらきめを見てかんにんすべきなとゝはおもはさりつる也。さきの人の心のかはりはてたるのちもなをしのぶはわがこゝろさへかはるといへるなり。さへといふにてさきの人の心のかはるをうみてよめるなるべし。

『新抄』

右 待賢門院堀川

うき人を忍ふへしとはおもひきやわか心さへなとかはるらん
千載〇はじめよりかくのこときのつらきめをみてかんにんすべきなとゝはおもはざりつるを、さきの人のこゝろのかはりはてたるのちも、なをしのぶはわが心さへかわるといへるなり。さへといふにてさきの人の心のかはるをうらみてよめる成べし。

三本ともほとんど一致している。確かに「おもはさりつるを」(『改成』が『矢口本』では「おもはさりつる也」となっていたり、末尾が『新抄』が「人の心のかわるを」とあって、『改成』が「：かはりけるを」であるような相違は指摘できるが、ほぼ同じものと考えてよいと思われる。

(2)『改成』

左 紫式部

見し人の煙となりしゆふべよりなぞむつましき汐かまのうら

新古今〇此詞書に、上東門院に少将身まかりて後、つねにうちとけて書かはしける文の物の中に侍りけるを見出して、と有り。もつともあいしやうのうた也。みし人をけふりになしてより、しほがまといふ名も一しほむつましきといへる成へし。名の字あはれふかにこそ。

『矢口本』

左 紫式部

見し人の煙となりしゆふべよりなぞむつましき汐がまのうら

新古今〇此詞書に、上東門院に少将身まかりて後、つねにうちとけて書かはしける文の物の中に侍りけるを見出して、と有。もつともあいしやうのうた

也。みし人をけふりになしてより、しほがまといふ名も一しほむつましきといへる成へし。名の字あはれふかにこそ。

『新抄』

左 紫式部

見し人の煙となりしゆふべよりなぞむつましき塩かまのうら

新古今〇此歌詞書に、上東門院に少将身まかりて後、つねにうちとけて書かはしける文の、物の中に侍りけるを見出て、とあり。尤あいしやうの歌也。見し人をけふりになしてより、しほがまといふ名も一しほむつましきといへるなるべし。夕の字あはれふかくこそ。

大伏氏が「この注釈の詞書は八一七番」のもので「齟齬をきたしている」と指摘しているように、『新古今集』八二〇番の詞書を引用すべきところを三者ともに間違えている。結局、依拠した『新抄』の誤謬をそのまま踏襲したことを示すものに他ならない。

大伏氏が既に寛政九年刊の『絵抄女歌仙』を『新抄』を「受け継いだ」と把握しておられるが、ここに『伊勢物語改成』と『矢口本』をも加えても同じように、『新抄』を「受け継いだ」形で、これらの注釈が利用、刊行されていたと考えられる。

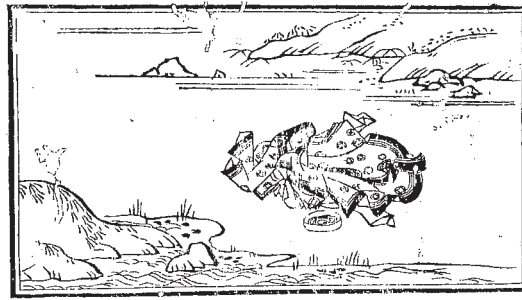
なお、これらの注釈の起源が『新抄』であるのか、目下これ以上遡る資料がない状態では憶測にすぎないが、『新抄』という名称から、あるいはさらに先行する類書があった可能性は否めないように思う。

四、『女歌仙絵抄』の絵と歌意絵

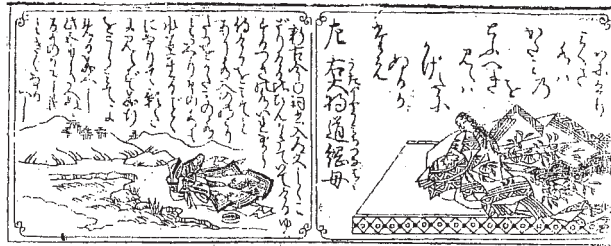
注釈に付随している絵について考えてみたい。それぞれ歌人を描いた歌仙絵と注釈を受けた歌意絵が付されているのである。歌意絵の例として、右大將道綱母を見てみたい。

顕著な例を次に掲げたが、『女歌仙新抄』の影響が『絵抄女歌仙』ばかりではなく、『改成』や『矢口本』にも強く見ることが出来る。道綱母の歌意絵で『絵抄女歌仙』の川の絵は、『新抄』の池の一部をそのまま転用していると考えられ、絵全体を利用した『改成』や『矢口本』とは利用のしかたが

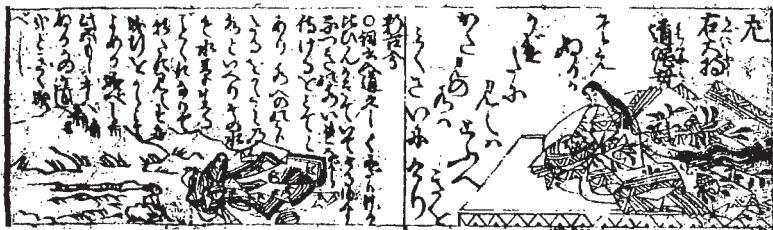
【図版九】右大将道綱母



『新抄』



『改成』



『矢口本』



『絵抄女歌仙』

【図版一〇】 斎宮女御



『女歌仙新抄』（歌意絵）



『矢口本』（注と歌意絵）



『伊勢物語改成』（注と歌意絵）



『絵抄女歌仙』（全体）

相違する。また斎宮女御の場合も『絵抄女歌仙』は塩を汲む男の姿を中心に描かれていて、『新抄』の須磨の風景の部分は省略されているのに対し、『改成』や『矢口本』では絵そのものは粗い仕上がりであるものの、屋根らしきものを左隅に描くところまで構図としては踏襲している。

結果的に現存資料だけで考えれば、『新抄』↓『改成』↓『絵抄女歌仙』という刊行年次による流れではなく、『新抄』↓『改成』・『矢口本』、『新抄』↓『絵抄女歌仙』という二つの伝流を考えたほうがわかりやすい。

さて、もう一つの絵、歌仙絵についてはどうであろうか。次の図版一である。ここに掲げた『七宝百人一首』（以下『七宝』と略称する）は、元禄一年の刊、『改成』と同年の刊行となるもので、『女三十六歌仙』を掲載しているのが、ここに掲げたが、『新抄』・『改成』・『七宝』・『絵抄女歌仙』は、伊勢の姿勢、裳裾の文様など、ともに類似した図を用いていることが明白である。大きな相違は、『絵抄女歌仙』で畳が省略されていることがあるが、『新抄』と、合刻のために小さなスペースに歌仙絵をも描き込んだ『改成』と『七宝』がじつによく似ていることに興味を覚える。

『改成』の『女歌仙絵抄』の本文、歌意絵、歌仙絵の比較から、『新抄』と『改成』や『矢口本』との関係はかなり近い関係であったと想像される。絵が小さいための粗さは否めないものの、注釈も歌意絵もそのまま利用したようなものである。

五、『歌仙絵抄』の性格

新藤氏が『歌仙絵抄』として翻刻・紹介しておられるのは、文化七年（一八一〇）刊行された藤原正臣の著で、本稿で取り上げた『歌仙絵抄』とは同名異書である。ともに簡潔な注釈ではあるが、正臣『歌仙絵抄』は新藤氏が詳述するように、選定された和歌は一首歌仙本の流布的な存在の拾穂抄型と歌仙抄型の中間のような形態でありながら、藤原元真だけは全く独自の和歌「思ひつつ夢にぞみつる」を選出している。一方『改成』は、『歌仙抄』と和歌が全く一致していて、歌仙抄型の伝本で、この両者は所収歌に相違が見られる。

ともに簡潔な注釈で、確かに注釈の分量や内容などに類似点は見受けられ

るが、それは同じ和歌をわかりやすく簡潔にまとめた結果の類似である。そして、『改成』の注釈には、依拠した注釈本文があったのである。

(3)

『改成』

左 在原業平朝臣

世の中にたえてさくらのなかりせは春の心はのとけからまし
古今第一春哥。此哥は、花にしうしんのあまりにふかきよりいへるなり。されはるは花にわか身をなやまされて、やすき心もなければおもひわびて、たえてさくらのなきそならは中／＼のとかなる春をは経べきものとなり。

『歌仙抄』

在原業平朝臣 平城天皇御孫阿保親王男 五男仍号在五中将

よの中に絶て桜のなかりせは春の心はのとけからまし

古今詞書に、なきさの院にてさくらを見てよめると有。これは惟高親王の交野に獵し給ふ供にまかりてかの院にて桜をかさしにしてよめるよし伊せものかたりにしるせり。此うたは花に執心のあまりにふかきよりいへるなり。春いたりてから暮果る迄、花にもの思ふことをいは、先いまたさかぬ以前にはいつしかと待わふるに心をくたき、すてに咲そめては明暮花に身をなさんと思ふかれ、ちるにおよひては其別をなけくこと切なり。散過後後には猶名残忘れかたし。されは春三月の間は一向花にわか身をなやまされて安き心なけれは思わひて絶てさくらのなきそならは、中／＼のとかなる春をは経べきものをとなり。花のきはしきにてかくいふにはあらねど、とかく心にあきたらすおもふに、かなはぬ花なれはおもひあまりてかくいふ也。忠岑かうたに、春は猶われにてしりぬ花さかり心のとけき人はあらし、なとよめるも同じ。

(4)

『改成』

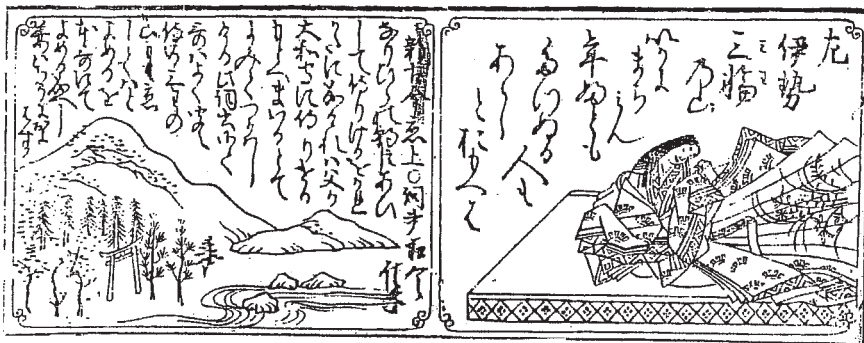
左 権中納言敦忠

いせの海ちひろのはまにひろふとも今はなにてふかひかあるへき
後撰第十二恋哥。此心は、としころ思ひかけ奉りし君の、さいくうにさたまりていせへくだり給ひしかは、いかてとたのみわたりし君しもかゝる御身にさたまらせ給へは、何事もかひなくなりぬる世かな、といふ心也。さるによ

【図版一一】 伊勢



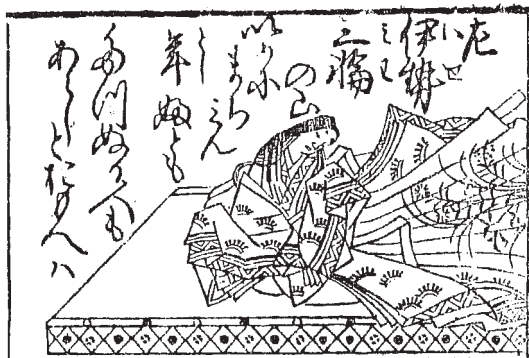
『新抄』（全体）



『改成』（「新古今」を消して、下に「古今集」と朱の書入あり）



『絵抄女歌仙』(全体)



『七宝百人一首』(歌仙絵)



『矢口本』(歌仙絵)

りて、そのうらをとり出てよめり。

『歌仙抄』

権中納言敦忠 本院左大臣時平公三男母在原棟梁女

いせの海ちひろの浜に拾ふ共今は何てふかひか有へき

後撰恋五、詞書に西四条の前斎宮またみこものし給ひし時、心さし有て思ふこと侍ける間に、斎宮に定りたまひにければ、其明る朝たに賢木の枝につけてさしおかせ侍けるを、と有。斎宮は、延喜帝の皇女雅子内親王、またた、人にておはしましける時に、敦忠朝臣心をかけて既に相見えんとしけるに、思はすいせの斎宮に定まりたまひければ其たのみのいたつらに成にけることを申をくれる也。うたの心は、としころ思かけ奉りていかでたとのみわたりし君しもかゝる御身にさたまらせたまへは何こともかひなく成ぬる世哉といふ也。斎宮に成給ひては、やかていせの国に下らせ給へは、その海をはとり出てよむ也。ちひろの浜とはかきりもなく広き浜の心なり。たとへは千尋の海、ちひろのたゝ縄なといふに同じものゝふかきことをも長きことをも、ちいるといへは、千尋の浜は長浜の心なり。七尺を一尋ともいひ、又は八尺をもいふ。されは千尋ははかりなきこと也。さやうの広き浜に出て拾ふ共、何のかひか有へきと也。ものゝかひなきことを貝によせてかくいへり。何てふかひは、何のいふ甲斐など心得へし。此うた大和ものかたりには、今はかひなくおもほゆる哉と有。引歌、和泉式部

塩のまによものうらく見すれとも今はわか身のいふかひもなし、などよめるうた数しらす。又斎宮は垂仁天皇の御女、倭姫の命を其はしめとす。天皇の御むすめを天照大神につけていはひたてまつらせ給へは、斎宮とかきて、いはひの宮共よみ、又いつきの宮とも申也。

(3)では、『歌仙抄』の点線で囲んだ部分を利用し、(4)では点線で囲んだ部分に一部言葉を補ってまとめたものが、『改成』の『歌仙絵抄』であることが明らかである。『改成』の『歌仙絵抄』は、このように先行した『歌仙抄』の注釈の一部を巧みに利用して創られた注釈書なのである。『歌仙抄』は、下河辺長流の著、寛文六年(一六六六)に刊行されている注釈書で、和歌と注釈のみで歌意絵は勿論、歌仙絵もない。

【図版一二】 歌仙絵 人麻呂・躬恒・家持



『改成』(歌仙絵と注・歌意絵)



『矢口本』(歌仙絵)



『七宝』(歌仙絵)

それでは、『改成』に用いられた歌仙絵・歌意絵は、どこから来たのであろうか。歌意絵については類似の書を未だ探していないので比較できないが、歌仙絵は、『七宝』と『矢口本』とが非常に近い構図となっていることに気づく。左に人麻呂、躬恒、家持の歌仙絵を掲げた。人麻呂の姿勢、狩衣の文様、躬恒の姿勢や笏の向き、家持の顔の向きなど、偶然では考えられない近さなのである。

さて、このような歌仙絵の形態から、何か手本のようなもの、依拠した資料の存在を想定すべきだと思うのだが、目下未詳というしかない。ただ『改成』が『女歌仙絵抄』を先行する『新抄』からほとんど写し取ったように踏襲していることを考えあわせると、この『歌仙絵抄』も歌意絵を含めて、何らかの依拠した資料の存在を想起させる。

また、かつて『百人一首』版本に合刻された「三十六歌仙」について調査し、そのほとんどが『歌仙抄』型であることを指摘したことがあるが、このような歌仙絵の類似から、あるいは、歌仙絵も簡潔な注釈もある『歌仙絵抄』のようなものの歌と歌仙絵がこの時期の「三十六歌仙」に踏襲され、さらに後発の『百人一首』版本に利用されていたとは考えられないであろうか。

六、結びにかえて

『伊勢物語改成』に合刻されている『女歌仙絵抄』『歌仙絵抄』について、略述した。ともに三六首からなる小さな詞華集で、『百人一首』の半数にも満たない歌で構成されている。が、『百人一首』とともに、古典和歌の粹を結集した作品でもある。和歌入門書として、この二つの作品もまた格好の作品でもあったのである。本稿では、このような詞華集の教養的注釈としてある時点における作品享受という形で、把えてみた。注釈がより完璧を期するのであれば勅撰集の当該歌の注釈部分を引用、精読すればいいはずであるが、あえてこのような注釈書が出ていること、そして歌仙絵や歌意絵という形でも享受されていることは、最近まであまり注目されてこなかった部分でもある。歌仙絵の普及・伝播などにも関わってくる要素があり、文学という範疇に収まりきらない部分も含むのだが、あえてこの時期の『女歌仙絵抄』『歌仙絵抄』に言及した。この元禄という時期の出版、とりわけ教養書の出版に

は著しいものがあり、その時期の注釈書の一端を垣間見ることも、本稿の目的の一つであった。

『女歌仙絵抄』という作品や『歌仙絵抄』という作品の位置、というよりも、この時期の絵入り注釈書の性格の一端が明らかになったように思われる。先行する注釈書を利用しながら、新たな出版物に合刻しているのである。さらに、『百人一首』版本は、これ以降「三十六歌仙」や「女三十六歌仙」などを合刻していくのであるが、この時期の作品が一部資料として利用されているように想像している。

今後は、さらに歌仙絵・女房歌仙絵の描かれ方、伝播などについて精査し、注釈とその伝播についても、さらに資料を博搜してゆきたい。

注1 平成一六年五月・新典社刊、以下の引用もこの書による。

注2 平成七年六月・新典社刊、以下の引用もこの書による。

注3 『元禄和歌史の基礎構築』平成一三年一〇月・岩波書店刊。

注4 『改訂増補大江文庫目録——江戸時代編 女子教訓及び女子往来物——』平成一二年一〇月・東京家政学院大学附属図書館編集・発行。

注5 湯沢賢之助氏『近世出版百人一首書目集成』平成六年五月・新典社刊、及び吉海直人氏編『百人一首年表』平成九年一〇月、青裳堂書店刊、による。

注6 天理大学善本叢書六七巻『師宣政信繪本集』昭和五八年三月・八木書店刊。

注7 国文学研究資料館のマイクロフィルムによる。ヤ8—36—5、C—〇八六一。

注8 「近世期における『三十六歌仙』享受の一面——『百人一首』版本に合刻された一首歌仙本——」(『人文研究』六八号・平成一一年九月)

〔付記〕資料の閲覧ならびに本稿に図版掲載を許可して下さい。東京家政学院付属図書館大江文庫には格段のお世話を頂いた。ここに記して、謝意を表したい。